

## 野上弥生子の方法(三)

——「黒い行列」「迷路」の改稿——

宮尾俊彦\*

六十になりかけて、私にはろくな長編一つないのが、今更に口惜しく恥しい。(昭和18・7・2)

『欧米の旅』が完成して、旅行記とはいってもこれには私の思想、感情、批判の悉くが入っているのだ。しかし私の創作的欲望はやつぱりこのくらゐの長い立派なものを死ぬまでには一つでも残しておき度い念ひに駆りたてられる。毎月のくらしの事を今は気にやむ心配はなく、子供たちの成育に煩はされることもない、さうしてもとの精根はなくともまだ雑事にさへ遠<sup>と</sup>かればアタマもからだも二三時間は疲労しないのである。目下の状態をもし利用しなかつたら私は救ふべからざる怠けものといふべきであらう。(7・3)

七月二日の日記記事は、ジョルジュ・サンドの『アンヂアナ』を読み返した折の感想であり、三日のそれは夫豊一郎との欧米旅行の紀行文が出来上って、送られてきた折のものである。『欧米の旅』は上下で千二百ページに及ぶ膨大なものとなったが、それはあくまでも紀行文であって、創作ではなかったが故に弥生子の

この感慨となったのである。「目下の状態を利用しなかつたら」といっているが、太平洋戦争下の弥生子は、結局「怠けもの」として過ごしてしまった。いや、怠け者といってしまつてはいけないのかも知れない。彼女はあの戦時下の不自由な時を、ヨーロッパ文学を熟読することに専念し、そこから吸収した養分を貯えつづけたのであった。『廿日単と男たち』『セヴィラの理髪師』『アベラールとエロイーズ』『アラビアのロレンス』『二都物語』等々。自由な創作を許さない時勢のもとでは、彼女は思いのままの執筆活動がでなかつたのである。今は待つしかなかった。

時期の到来を待ちつつとじづかにしてゐられるのは、その事だけでも非常な仕合せである。(19・6・6)

そして戦争は終わった。「これで五年間の大バクチはずつからからの負けで終つたわけである」(20・8・15)、これが弥生子の敗戦の日の感想であった。

どつしりと落ちついて、よいものを書くことが今は一番大切なことである。(21・1・4)

彼女（パール・バック）らの堂々たる大きな仕事を思ふと、目前の執筆の注文や小遣ひとりには誘惑されないうで、高い目標をおいて書かなければならぬといふことを今更にかんじてゐる。私も六十三だ、まだそれだけの精力が今ならばあると信ずるが、だんだん年を加へればそれもむづかしいだらう。今の時間と独居の静寂を利用しなければならぬ。（1・25）

これは新たな年を迎えての決意である。今なお己れの代表作と誇れる作物を持たぬことを常に嘆いてきた彼女の、大作への意欲がうかがえよう。

そんな折、

改造社からはまた女性改造が五月から出るの、それに書いてくれとたのんで来たのであるが、新生社に書いてゐるので断つたのである。「黒い行列」のつづきを書かないかともたのんで来た。（21・3・20）

のである。弥生子は「時機を見て書き度い旨を返事した」（3・22）。

全てを押し流すかと思われたあの滔々たる黒い流れも、敗戦によつて辛うじて堰きとめられ、『迷路』再開の機は熟しつゝあったのである。同じ年の三月二十八日に『女性改造』の編集者が来訪した。六月に創刊となるので「それに書いてくれといふ事と、『黒い行列』を連載してくれとの用事でわざ／＼東京から来た」のである。「その方は夏頃からの約束で承知」と記すが、これは「黒い行列」を『女性改造』に連載することを承知したのか、それとも創刊号に何かを書くことを承知したのか。ここは「夏頃から」とあるので、どうやら「黒い行列」の連載かと思われる。その後弥生子は、稿料のためもあり、また前々からの約束もあって、「小使ひとり」と自嘲する作品を次々と書き上げてゆく。

六月二十七日は、「とにかくこれでこの頃から考へてゐた事が片づいた」ので、「昨日は中央の畑中、改造の黒田両君に手紙を出し」ているが、それは「黒い行列」の件ではなかったらうか。ところが、六月三十日には『女性改造』の編集者が訪ねてきて、「私へは『黒い行列』のまへに北軽ものつづきを書いてくれとのたのみである。『狐』を書くことを約束する。」ということになつてしまふ。ここに出てくる「北軽もの」とは、この年四月に『世界』に掲載された「砂糖」のことである。「狐」の執筆は七月二十一日に開始されて九月二十日には書き上げられた。約束は『女性改造』であつたが、「分量が多く、ものも女性改造にはおし」ということで、『改造』十一月号に掲載されることになる。

この頃、九月三日の日記に、

もう金のために書く必要はない。ただよい立派なものを書くことのみが私に課せられてゐる。

とあるように、家計の状況にはかなり余裕ができてきた。長篇にとりかかる環境は整つたのであるが、直ぐ着手ということにはならなかつた。

（前略）新潮社の丸山氏松本より来訪。「砂糖」をひどくほめ、新年号の小説を書いてくれとの依頼。あと一つ書いて北軽ものをおしまひにしようとしてゐるところ故、「黒い行列」にかかるとまへにそれを書かうと決心する。（21・10・1）

というこで、翌二日から早速着手する。題は「神様」で、十一月十八日には書き上がつてゐる。

「狐」ほどではないが、とにかくこの土地と疎開仲間のすがたは描き終へたつもりであり、戦争をバックにした一つの集団生活のユーモラスで皮肉なすがたは読むものを楽ませるだらう。日記を見ると十月二日にかかつてゐる。そのあと父

さんが来たり、市河夫妻が来たりでたつぷり十日は邪魔がはいつてゐるからぎつと一と月間ぐらゐの仕事になつた。百枚のものが一と月ぐらゐに出来るやうになつたのは、全くこの頃の事で、且つ北軽生活のためのものである。(11・18)

仕事に脂がのつてきたことを自覚しているようである。しかし「黒い行列」の改稿にはまた手がつかない。評伝『ソーニヤ・コヴアレフスカヤ』改稿の書きだめその他、小品の執筆がつづけられる。

「黒い行列」なる題名が再び日記に顔をみせるのは、二十二年三月四日である。多分、「鍵——へんな村の話——」(芸林間歩)の原稿執筆中のことであろう、台湾のアミ族の家にはカギがあつた事を思い出したことに続いて、「黒い行列」の主人公をタイワンにやる事をこの間より思ひ浮かべてゐる」とある。ただし、この思いつきは作品には採り入れられなかったが。ちなみに弥生子の台湾旅行は昭和十年のことであつた。

そして五月四日、「吉野源三郎氏より返事。黒い行列を世界にのせること決定」とある。発表の舞台は決まつたのである。四月十五日付小林勇宛書簡には、

『世界』に私の『黒い行列』れん載——といふより一二ヶ月おき間載のこと、吉野氏へまで今日手紙にて申送りおき候。とあるが、先の日記記事はその結果である。

吉野源三郎には五月十六日付で、  
啓上 先日は御返事を有りがたく拝見いたしました候。

かうなつてはいよ／＼背水の陣にて遁れられないわけにこれあり候。しかし前便に申上げ候通り、これから書くのであり御存じのノイ筆故二三回もすんでから発表いたし度く、且つ夏は私には机仕事とは疎遠の生活と相なり候につき右御含

み下され、気長に書かせて頂き度く願ひ上げ候。

執筆開始へと自分を追い込んでゐるようである。一八日には「黒い行列」をよみ返さうと思つた本棚を探したら見あたらない。東京にもつて帰つたままであらうか?とあるのは、いよいよとりかかろうというのであらう。

六月一七日には、「黒い行列」の冒頭の一句を朝おさうぢしつつぶと思ひつく。」と記す。その冒頭の一句とは、改稿「迷路」の冒頭「菅野省三はそんなことは思ひ出してもゐなかつた。」のことであるうか。「黒い行列」では「菅野省三はそんなことはその時まで考へてもゐなかつた。」となつてゐる。「思ひ出して」と「考へて」の違いだけである。その程度のことをわざわざ「思ひつく」などとことごとしく記したのであるうか、少々疑問である。あるいは採用はされなかつたが、もっと他の語句を思ひついたのであつたか。もっとも、「思ひ出す」と「考へ」るの内容は、文脈からすると多少異なるようにも思われるが。

さて、改稿の方であるが、なかなか手がつけられない。三男の妻子が同居するようになって落ち着かないことも原因の一つである。

独居と無言に馴れてゐる私は、たえず何かいはねばならぬこと、人が同じ家に動いてゐることは、それだけで一種の負担である。三枝子は善良で素直であるが、かうした心理には察しがつかない。(中略)この様子で夏休みになつたら、九月までものを書く時間と余裕を見出せないのではなからうか。

(22・7・4)

その上体調まで崩してしまふ。「赤ん坊本位の、しんから落ちつきのない生活の疲労もいつしよに出たものらしい。十八日はうつら／＼無力に、精根のつきたかんで疎ましくしてしまふ。」(7・20)

といった有様であった。

弥生子は、その小説家としての生活においては徹底的にエゴイストである。夫や弟がやって来てさえも、そのこと自体は嬉しいのだが、執筆にはさしさわりのあると愚痴るのである。

## 二

久しぶりに独居の朝であった。「黒い行列」の書き直しを待つ。私はやつぱりひとり孤独に住まなければならぬ。

(22・8・3)

今日も「黒い行列」のつづき。直ぐはじめて本統によかつた。(8・7)

いつから書き直しが始まったのか、突然以上のような記事が現われる。いずれにしても同居していた三男一家が居を移したがゆえに、執筆環境が整ったのである。

そのつぎに関係記事がみえるのは、「久しぶりに『黒い行列』をつづける」という九月十日の日記であるが、九月十六日にはつぎのような記述がみられる。

昨日岩波雄二郎君より、「世界」の小説十二月よりのせ度き旨速達が来たので、改作中の返事をし、はじめからのせ度き希望をのべた手紙をもことづける。

同じ九月十六日付の夫豊一郎宛書簡では、

(前略)雄二郎君から昨日速達で、「世界」の小説十二月号から欲しき旨いつて来ました。しかし私は「黒い行列」をはじめからすつかり書き直してゐるのです。もう古い以前に書いて、若い連中でも知らぬものが多いから、それをはじめから出して貰ひ度いと思ひます。それが出来れば十二月号から出せるが、でなければ、もつと先きでないと載せられません。

とにかく、今年は五月から百日あまり机仕事と縁をきつたのですから。直しのものをはじめから出すか、やつぱり続篇だけ出すかを今は手紙で交渉するところです。父さんも序があればその旨お話し下さい。(中略)とにかくもう金とり仕事で急ぐより、死んでも残りうるものだけに専念すべき時期に達してゐると私は信じます。「世界」がどうしても続篇をのぞめば、直しをすませ——といふより新しい人物も出て改作にもなるのですから。——その上でゆつくり続篇を書きなおすつもりです。

少々長い引用になつたが、弥生子の当時の心づもりが伺えよう。ちなみにこの折改稿(作)された「黒い行列」は、翌二十三年十月に『迷路』第一部として岩波書店より刊行されるのであり、また改稿された「迷路」は、同十二月に『迷路』第二部として続いて刊行された。そして雑誌『世界』への連載は二十四年一月の「江島宗通」の章からということになる。

さて、翌九月十七日の日記には、「執筆順調、新しい女性として利根子現はる」とある。現『迷路』には利根子なる女性は登場しない。「黒い行列」と改稿された現『迷路』とを全集第九巻の対校本でみてゆくと、五月祭での小田との出会いの後、垂水家を訪ねた省三と多津枝とのやりとりの中に、「万里子」という名前が出てくる。増井礼三の姪で混血の娘として設定されているのであるが、この万里子が日記でいう「新しい女性」としての利根子であろうか。ただ、万里子という名前はマリーに通じて、いかにも混血児という設定にふさわしいが、利根子ではどうであろうか。少々ひっかかるところではある。いずれにしても、新しく登場した万里子の存在はこの作品において大変重要であるが、後述する以後、改稿作業については「順調」という言葉で幾度か記され

る。「黒い行列」に属する現『迷路』中の「多津枝」「潮の香」の章の部分にはほとんど手を加えていないので、順調であったはずである。そして、「小さい顔」の章になるわけであるが、九月二十一日の記事にはつぎのような記述がみられる。

今日は非常に幸運なことがあった。三角戸棚から、「迷路」と題して「黒い行列」の後篇百五十枚あまりの原稿を発見。二・二六事件からかきはじめてある。「中公」で発表されず、そのままになつてゐたもの也。物置に手紙類においてあつたのを、「黒い行列」の古原稿と思つて、とにかくそれをもつて来て三角戸棚に入れたことだけはおぼへてゐたが、続きであつた事は、今日あけて見てはじめて分つた。これがあれば、都合でははじめからでなくとも、「世界」にのせはじめても追つつかれないかもしれない。

つづいてつぎの記事がある。

「迷路」をよんで見る。わりによく書いてゐる。直しつづ書き改めれば、一層よくなるだらう。「ゲンコウニツキフミユク」と雄ちゃんにデンポオを打つ(9・22)

雄二郎ちゃんに発見した原稿について手紙かく。(9・23)

ところがこの発見は糠よるこびに終つた。十月七日に岩波雄二郎が山荘にやってきて、「私が未発表の原稿とおもつた迷路は中公に出たものらしい。雄二ちゃんはよんで知つてゐる」というわけである。呑気なものである。「私もそんな気がしたが、普通は中公は原稿を返却しないのが例なのに、それが見つかつたので、発表不能で返却したのかも考へた」といい、「記憶といふものは、ほんとうにアテにならない。(中略)しかしこれほどヌケくとももの忘れしたことは従来はないので、年齢のせみかと思ひ、自信を失つたかんじである。」というのがその結末であつた。

ところで、この頃改稿された「黒い行列」は、『世界』にはじめから掲載されることになつていたのだが、既述のように単行本として刊行された。そうなつた経緯は、先の十月七日の日記によると「原稿のことは、最初から世界にのせると、古く書いたものだけ小一年かかる。それが吉野さんはじめ編集仲間の懸念らしい。最も「の」ことである。」ということから、「今までのものを一冊として岩波から刊行、それが発行される頃までに続きを書いて『世界』にのせることに決定した。」(10・8)という次第である。ともかく改作(改稿)が急がれることとなつた。

十月十日までには「潮の香」の章までは済んだようで、「執筆は明日から新しい挿入の章になる。うまく行つてくれますように。」とある。実際の執筆は十二月からで、「執筆の進度はのろいが、しかしわるい向き方ではない。」(10・13)「挿入の段章がわりにはうまく行つてうれし。」(10・20)とあつて、十月二十六日に「万里子の新しき挿入すむ。まづ成功とおもふ。」ということ、「小さい顔」の章が完成した。この章は、改稿した「五月祭」の章で予告してあつた盲腸手術の万里子を見舞う場面が中心で、万里子の境遇や性格などが素直に描かれている。すらすらと書かれたという印象を受ける。

つぎは「黒い行列」の末尾、改稿の「軽井沢」の章である。

執筆は殆んど新しく書き改める箇所が多く、進度はのろい。

しかしわるい遅延ではない。(10・28)

とある。確かにこの章には何箇所かのかんりの分量の書き加えがみられる。その一つは、阿藤邸での省三と木津との対話の部分である。二・二六事件前の国情が語られ、批評されている。「改造社の吉田氏が満洲事変より終戦までの重なる出来事を書いて来てくれた。」とあるのは、十一月四日の日記である。小説には、浜

口・大養両首相の暗殺事件、国際聯盟からの脱退、満洲国の樹立、更には「ほんの二週間まへ」のこととして軍務局長永田鉄山殺害事件にも触れられ、陸軍部内の統制・皇道二派の抗争から、やがて「黒い流れ」の章における二・二六事件へと展開する伏線が張られている。『改造』編集者の資料が早速活用されたのである。

ところが、所謂革新派の若い将校連は、大抵貧農か下級勤労者の子弟なんだからね。眼科医の腕次第では、左側の眼だつて見えるやうにしてやれないことはない、と彼は信じてゐるらしい。(「軽井沢」)

このような考え方は、この作品における二・二六事件の叙述ともつながるわけであり、それは弥生子が戦後に得た史観であろうか。その当時の社会状況について、戦後の彼女はかなりの情報を持っていたのではないかと考えられるが、それを可能にしたのはほかでもない弥生子のおかれた社会的、階級的位置であつたらう。つぎに改稿によって大きく膨らんだのは、増井礼三の設定である。「黒い行列」では、名前も「荒助」とあるが、改稿で「礼三」と改められ、その位置づけが大きく変わったものと思われる。つまり、単なる荒稼ぎをする事業家としての増井から、目はしが利き、時代をも見通せる剛腹な実業家像への転換である。それが「礼三」という改名にも表われているものと考ええる。万里子と省三のよき理解者という設定となった。

「軽井沢」におけるもう一つの大きな書き加えは、前章「小さい顔」からの流れで、万里子を登場させたことであらう。万里子はいよいよ明瞭に描出され、そのためか「黒い行列」には登場していた多津枝の妹美紗子の存在は消されてしまった。以後のこの作品における万里子の存在の意味の大きさを予期させるものであらう。

さて、改稿作業はその後も順調であつたが、十一月十九日の日記には、「執筆順調なれど進行はのろく」とあり、いよいよ改稿もヤマ場にかさしかつたことを思わせる。翌二十日の記事は、「午前米川夫人来訪。それで執筆中止。よく話す。(中略)今改作の肝じんなところにて、苦心してゐる中にとび込みは少し困る。」とする。そして二十二日の日記は、「この数日書き迷つてゐるところがどうにか旨く行きさうである。」と記すが、具体的には、

最後「の」ところで省三と多津枝は旧作では接吻する。それを改作でもさせるかさせまいかと、これで三日も迷つてゐる。作物で人を殺さうか殺ろすまいかと迷ふ話あれど、これは接吻故一層へんな苦心也。(11・24)

とあることでその内容がわかる。そして翌二十五日にはこう記す。最後のかたがどうにかついた。接吻はさせたが、旧作とは違つた意味にした。この方が自然だと信ずる。

そこで、この改稿の意味、特に「接吻はさせたが、旧作とは違つた意味にした」について少し考えてみたい。

私は前稿で、「黒い行列」の末尾に付記された、「この作物はこれだけで纏まつた一篇として読んで頂き得ると思ふが」の一文に對して、まとまつた一篇とするには不充分であつたと評した。弥生子自身も、

すんだ時はどんなにほつととして嬉しいだらうと考へてゐたが、それほど強いかんじが起らなかつた。それは結末のさせ方に少し疑惑が残されたからかも知れない。(11・10・6)

と日記に記している。そのことに関連して私は、この結末が必ずしも「よみきり」の形になっていない、つまり、この場面での二人の接吻があまりに唐突であり、その意味づけが全くなされてない。たとえその接吻が衝動的なものであつたとしても、どこか

にそれが必然的なものであったと納得させるものがなくてはなるまい、と論じた。

ここで弥生子自身の「疑惑」、そして私の批判に応えるかのよりに、彼女は「旧稿とは違った意味」をこの接吻に与えようとしたのである。その点について少し考察を加えてみたい。

この終りに書き加えられた、原稿用紙にして五枚強の内容をみてみよう。この書き加えて弥生子は多津枝に、「(前略) 稲生なんか顔をみるのも厭だわ。——省三さん、わたしと結婚しなさい。」と彼女自身もびっくりするようなことを口走らせている。そして、そのことばについて弥生子は、「二人の間柄ではいつか機会があれば飛び出したかも知れない言葉が出たまでのことであつた」と説明する。従つて省三の方にも「混乱はなかつた」わけである。この後、多津枝は自分のことばが単なる口から出まかせのものでなかつたことを懸命に説明するが、省三は、その多津枝の今の気持は嘘ではないが、やがては後悔するものだといつて、多津枝が今の生活を蹴飛ばすことは出来ないと言き放す。そして省三自身は、己れの苦しみ、迷い、意気地なさを多津枝の前に告白する。こうした経過の中で、二人は本当に互いを理解し合うことができたのである。二人の気持が一つになったところに、接吻の場面が設定される。そしてそれはつぎのように説明される。

兄妹よりは魅力のあり過ぎる、友情に比べればずっと肉親的で、恋人同士にしては淡くこだはりのない二人の今日までの愛情の、これはあらたな確認であつたかも知れない。同時にまたそれは、多津枝の結婚によつて起こる筈の二人の過去への訣別でもあつた。(軽井沢)

他方、「黒い行列」での接吻は、「氣狂ひのやうに接吻し」、玄関に人声がすると「多津枝を突き除け、冷たい雨に煙ぶる庭を何

気なく眺める風で窓際に立つた」とあるように、全く衝動的であり、後ろ暗さを伴うものであつた。それはこれから先の二人の關係に何かをもたらすものではなかつたといえよう。それに対して、改稿における接吻は、これからの二人の間柄に節度をもちたらし、互いに相手を十全に理解し合い、支え合うものとする出発点となつてゐる。

省三と多津枝が己れの傷口をさらけ出し、互いに相手の傷口をつつき合い、その痛みから生まれた相互理解の上に立つた接吻。それこそが弥生子の「自然だと信じ」たものであつたと考える。現「迷路」における以後の二人の關係は、ここで敷かれたレールの上に乗つてゐるのである。

さて、改稿作業はこれで終つたわけではないやうで、十一月二十七日には

改作一と先づ前半を終へたつもりが、とち直すまへもう一度よむとまたいくらでも手を入れ度くなつて、毎日それに没頭してゐるのである。

と記す。そして三十日になつて、「改作のあとの手入れ、やつとすむ。」となり、その日上京する知人に原稿を托す。

「迷路」一部の原稿半ピラ四百七十五枚もつて帰つて貰ふ。

改稿された「迷路」第一部(旧稿「黒い行列」)の原稿枚数は四百七十五枚とあるが、改稿前の「黒い行列」の分量はどの位であるうか。ざつと数えて三百枚余となる。従つて五割強の分量が書き加えられたとみてよい。

### 三

旧稿「迷路」の改稿は十二月十一日に始まる。「今日から「迷路」にかかる」とある。それからは改稿の日々であるが、十三日

の日記には、

(前略)ワタを離室までとりに行つた序でに日記を全部もつてをりた。よく長年つけたものかな、と我ながら驚く。二・二六のときの記事も委し「く」書いてあり、今の改作に役立つ。

とある。旧稿「迷路」の初まりは、改稿『迷路』の「黒い流れ」の章に当たり、二・二六事件を扱っている章である。

十二月十四日には「今日は一枚しか進まない」とあるが、その後年内の日記に改稿に関する記事は見られない。新聞、雑誌への寄稿原稿の作成に追われていたのであろう。この年の大晦日の日記は、「私の仕事も今秋で糸口がついたわけで、むづかしいのはこれからである。これの完成が来年の仕事の目標になるであらう。」という記述で終っている。『迷路』第一部(旧稿「黒い行列」)の刊行が翌二十三年十月、第二部(旧稿「迷路」)が十二月に刊行されているから、「これの完成」という「来年」の目標は達成されたということになる。

昭和二十三年になった。正月も十四日までは夫や息子たちが山荘にやって来ており、執筆どころではなかったようである。

ひとりでのしづかな朝食。誰ともまだ口をきかず、自分の足音以外には他の足音も、身じろぎもきかぬ生活。——これらの生活は私には何物にも換へがたいものとなつた事が、今更かんじられる。父さんやSと住むことは、他の誰よりも安易なわけであり、世話はやけても、こころ愉しい筈であり、実際またさうであるが、それでもこの独り居のたのしさは、それとは別の愉楽である。よその人なら寂しさをかんずるであらうが、私にはやつと自分をとり戻したと思ふ念ひが先立つ。

(23・1・15)

こんな独居の生活が、弥生子の絶好の創作環境となっているのである。同日の日記には続いてつぎのように書く。

朝食のあと、こんな日記がノンキに書いてゐられるのも、まだ執筆に戻らないからである。それぞれ怠つてゐる手紙の返事でも今日はすまして、明日あたりからまた書きはじめよう。暮れの二十七日に日課をやめてから今日まで二十日あまりを空費したわけである。そのとり返しをしなければならぬ。

しかし執筆の再開は更に遅れて、二十一日からとなる。今日から午前の執筆をはじめ。

二十五日に「執筆進度よくない」と記すが、その後知人の葬儀などで仕事が出来ず、三十日になって、「ずつと中絶の仕事を今日はほんの少しであるがつづけた。」とあって、翌三十一日には、今二・二六のところで、いろ／＼書き改めが多く、苦しく遅延。

と記し、書き悩んでいる様子がうかがえるが、何が原因なのだろうか。

ちよつとつかへてゐた段章をすらすらパス。(2・5)

この間からつかへてゐた箇所がどうかパス出来さうである。こんな時は無理せず一寸ずり進む外ない。(2・6)

「黒い流れ」の章で、まず大きな書き加えの見られる箇所は、省三が郷里の兄の選挙違反事件で拘引された知らせを受け、垂水重太の所に電話をし、多津枝と会話をかわした部分である。そこには旧稿「迷路」にはなかった、郷里における政友・民政両党の政争についての記述が加わっている。この書き加えは、やがて省三の帰郷と郷里を舞台とする「故郷」以下の章で意味をもつてくることがなるといふ意味で重要であらう。

二月九日の日記には、



執筆順調。今の二・二六の当時、省三と多津枝との交渉のくんだり、書き直してずつとよくなつた。万里子のことも扱むことができた。

とある。多津枝と省三の関係については、前節において「黒い行列」結末の改稿部分で考察したが、そこでの書き直しがこの章に大きく影響している。

軽井沢での瞬間の思ひがけない行動は、ふたりを結びつける代りにぼろを曝けだし合つたあとこのやうにお互ひを怒らせ、省三もよくよくの用事がなければ訪ねないし、行つても多津枝は顔を見せないことが多かつた。(旧稿「迷路」)

軽井沢の暗い雨の日の出来事は、二人にそれまでとは違つたよい結びつきを与へたやうにその時は感じられたに拘はらず、彼らは却つてよそよそしくなつた。多津枝はなんかぼろをさらけ出したやうな負け惜しみから、いつそんなことがあつたか、といったやうな顔をわざとしてをり、省三はまた、彼女を相手に告白じみたことをいふがものはなかつた、と思ふところが、その態度を見るにつけても深まり、よくよくの用事でなければ出かけもしなかつたし、行つても多津枝は出て来ないことさへあつた。(「黒い流れ」)

軽井沢の出来事が、二人の間柄にひびを入れてしまったかのような旧稿の叙述に対して、改稿においては一段と深みのある心情描出になつている。

その新旧両稿の違いは、垂水家を訪ねた折の二人の対話に明白に表われていて、旧稿では多津枝が一方的に省三の卑怯を非難し、省三が思わず多津枝の頬を打ち、多津枝が部屋に引き籠もつてしまふということになり、二人の関係に全く進展がみられない。それに対し、改稿では互いに攻撃をし合いながら、その相手の批判

を納得し、受け入れてもいる。それは二人の相互理解が深まつたが故である。そして続いて、日記でいつているところの「万里子のこと」が扱まれる。万里子の誕生祝が話題となり、万里子と省三の間柄、万里子の人柄などがそれとなく説明されて後続の物語の伏線をなしている。

なお、改稿「黒い流れ」では、多津枝の人物像に深み加わり、彼女の結婚観、人生観のようなものが叙述されている。「幸福な結婚なるものを、誰か一人でもしてゐるであらうか」「人生は詩ではないと同じ意味に於いて、パンはパンであり、愛は愛であつた。石がパンに変わる可能性を信じない彼女は、愛がパンになる奇跡も信じなかつた。」等々。パンドラの匣の底に残されていた「希望」をたとえにして、夢を失つた多津枝の結婚観、その隅っこに唯一隠され、残っていたものは、官能への好奇心であつたという叙述も、彼女の人物像に陰影をもたらししているのではなからうか。ただそのことが、これ以後の物語の展開に何らの影も落としていないのはどうしたことか。

いづれにしても、「黒い行列」末尾の改稿からこの「黒い流れ」の章の書き加えによつて、弥生子自身がいうように「省三と多津枝のくだりは、書き直しによりずつとよくなつた」ことは確かである。

もう一箇所この章での書き加えがみられるのは、二・二六事件のエピソードともいふべき部分で、殺害された蔵相高橋是清に関するものと、書記官長邸に乗りつけた某夫人の武勇談である。両者とも、事件当時、昭和十一年三月十日の日記に見られる伝聞を用いたものである。本節冒頭に引いた二十二年十二月十三日の記事でいつているところの、離室からもつてきたとされる当時の日記が活用されたわけである。ここでのエピソードは、増井松子の

人物像を浮き彫りにするに役立っているといえよう。

なお、この改稿された「黒い流れ」の章に当たる旧稿「迷路」のその部分は、内容上非常に伏せ字が多い。その伏せ字を起こすのも、あるいは書き直しを手間どらせた原因になっているのであろう。

夜伏せ字を埋めかけたが、自分でも分らなくなつてゐるところがある。これからはメモをとつておく必要あり。(21・11・2)

これは『若い息子』の場合であつたが、「迷路」改稿の場合も同様であつたものと思われる。

改稿作業はその後順調であつたようで、二月十四日から十八日までずっと「執筆」の語が記されている。「執筆もめづらしく進度よく気持よし。」(2・16)とあつたり、十八日には、

執筆今までになき進度。夜食後またつづけることが出来た。

骨の折れない為——二・二六のところ、直キぎ改める箇所が少ないから。」

と記す。「黒い流れ」の章では、省三と多津枝の対話にかかわる部分、多津枝の人生観、結婚観を記した部分以外の箇所には、それほど苦心を要しなかつたのであろう。

ところが翌十九日、夫豊一郎が突然倒れた由の電報が届き、弥生子は急拠帰京することになる。幸い過労の故との診断で妻の看護もあつて順調に快方に向かつた。しかし、弥生子の創作環境はこの帰京によって全く乱されてしまい、以後執筆の記事は現われなくなる。豊一郎訳の「ガリヴァー」物語筆記のことがみえるばかりである。

また、長男素一の離婚裁判が丁度この時期に行われていた。素一はイタリー留学中に知り合つた女性と結婚し、戦後帰国して一

女を儲けていたが、文化や民族性の違いもあり、また母の弥生子も必ずしも気に入らず、所謂嫁姑の仲も円滑にいかかつたといふこともあつたか、離婚話にいたつたようである。素一自身はかなり未練もあつたのであるが、とうとう調停にかけることになつたのである。このことも弥生子の執筆環境を乱す一因となつていた。

なお、『迷路』の主要人物の一人である万里子は、日英の混血であつたが、そのような人物設定を弥生子に思いつかせたことには、彼女のこのような家庭状況があつたのではないかと思われる。もつとも、この万里子の存在はこの作品にとつて、つまりは主人公省三の生き方において大きな役割をしており、単に弥生子自身の身近な体験にもとづく、もの珍しさからの気まぐれの設定というものではなかつた。「この改作には、今後重要な役割を果す若い女性も現はれてゐる」と、『迷路』第一部はしがき」に書かれているとおりである。

万里子は、混血児であるという設定によって、伝統的な日本の女性像から解き放たれた存在となり、インターナショナルな認識、感性をもつ女性として、省三に大きな影響を与えることになる。弥生子自身は、ヨーロッパ的な教養、知性の持ち主として、新しい思想、感性を有し、日本女性の古い在り方から脱却しているものの、それは特殊なケースであり、作品中に弥生子自身の考えを投影した女性を登場させ、違和感のない存在とするには、万里子のような境遇設定が必要であつたのではなからうか。ただその発想の契機となつたのが、長男の妻子であつたのだと考えられよう。

三月二十日、病後の夫と初めて散歩して、直ぐ近所の家が売りに出ていることを知つた。当時夫が暮らしていたのは、三男一家の家であり、福岡にいるその一家は上京してくるこゝになつてい

た。長男は京都に独居しているが本拠は東京であった。

間数は七つぐらゐとのこと。来春モキ一家の上京のこと。Sが当分あの状態をつづける事を考慮すれば、どうしても一軒の家が必要となつて来る。路一つしか隔てぬ近さはよいことと共にわるい事もあらうが、兄弟力と心を合せて今後も生きて行く上には、都合のよい事のほうが多いだらう。(3・20)といった事で、人を介して調べてもらい、値段の交渉もしてもらうことになった。五月一日に購入が決まった。これが弥生子たちの持ち家となった成城の家である。和室四間、洋間九室という家であった。九十万円という高価な買い物である。「ガリヴァー」の翻訳も『ギリシヤ・ローマ神話』の仕事も、そのために急がねばならなかったが、ともかくこれだけの大金を用意できるだけの余裕が野上家にはあつたのである。夫の病を機に帰京したのであつたが、

今度の帰京は全く私たちの生活に重大なターニング・ポイントとなつた。父さんの病気の全快もありがたい。家の決定。Sの離婚の決定 これらはバラ／＼に来ると今よりはもつと多くの気扱ひと同時に時間の消費になつたに違ひない。

(5・2)

と記す。

あれやこれやで「迷路」の改稿は中断していたが、改めて執筆活動を続ける環境整備はできたといえよう。同日の日記には、迷路の校正を渡す。あと二ヶ月位で書物になるであらう。そのあひだにあとの改作をすまし、なほあたらしく続きが書かれれば大成かなれど。――

とある。校正に出したのは「迷路」第一部として刊行されたものであり、「あとの改作」とあるのは「黒い流れ」の章以降の第二

部のことである。弥生子はこの翌日北軽の山荘に戻ることになる。帰山後の五月九日の日記には、「迷路の後書を書きはじめた。」とある。

雑誌「世界」の好意ある申出で、彼らのための舞台も準備された。しかし続篇にとりかからうとして今まで書いてあつた部分を読み返して見た時、私は多くの不満を見出した。前に述べたやうに、今度の不幸な戦争を頂点とする日本の十数年の歩調には、一度も歩調を合はせた覚えはないが、しかし作品の中の字句の表現や、描写には、何か地雷火にぶつかるといとするやうな警戒や、消極的な回避が隠されてをり、現在ならば必要のない省略さへ余儀なくされてゐる。続篇を書くまへに改作を思ひたつたのはそのためである。<sup>(3)</sup>

改稿の意図するところは明らかである。なお、日記からも明らかのように、この五月九日の時点では第二部(「黒い流れ」「熊掌と爪」「夕雲」)の改稿は完了していない。つまりこのはしがきは、本来第一部のはしがきであつたものであり、「迷路」<sup>第一部</sup>はしがき」とされたのは、昭和二十七年に「一、二部まとめて出版することになつた」(前記「はしがき」の附記)折であつた。したがって「はしがき」本文中にも、「つづいて送りだす筈の第二部も、旧作とはだいたい異なる姿をとるであらう」とあるのである。

翌五月十日、

いよ／＼「迷路」にかかる。半ピラで十九枚進行。この調子ですつと行くと申分なしであるが……

と記すが、これは「熊掌と爪」の章にとりかかつたものと思われる。この後の筆の進みは順調そのもので、「十数枚から二十枚らくらくに進む。この分なら改作が今月にすむかもしれぬ。」(5・14)という状態であつた。それもそのはずで、「熊掌と爪」「夕

雲」の章の大部分は、わずかな手直しで済んでいるから進行は早いわけである。ただ兩章とも物語の次の展開をはらんでの書き加えがあるので、それについて少し考えてみたい。

まず「熊掌と爪」における大きな書き加えは二箇所、それはいずれも江島宗通にかかわるものである。「迷路」第三部、つまり戦後になって新たに稿を起したのは「江島宗通」の章からであるが、この改稿作業の最中にその構想はできあがったのである。その新しい展開へのつなぎとしてこの「熊掌と爪」の章で江島宗通にかかわる話題を取り上げておいたのである。宗通が能に異常な執着をもっていること、独身の奇人であることなどが書かれている。この江島宗通に、この小説における重要な役割を割りふる構想も既に出来あがっていたのではないかと思われる。このような宗通の設定は、弥生子が打ち込んできた能楽に関わるものであるだけに、この作品に厚みと幅とをもたらすことになった。

つぎの「夕雲」は、木津の妻せつにかかわる章である。改稿と書き加えは章末に四〇〇字詰にして九枚程度みられるだけであり、他の部分に大きな改変はなくすらすら進んだようである。この改稿については五月二十八日の日記に、「執筆は今日ムリすればすむが、改作の最後故、大事をとり二三枚を明朝に延期、まへよりこの章もずつとよくなつた」と記し、三十日にも、「改作の結末は前よりずつとよくなつた」と再び記すように、かなり満足がいったようである。それでは具体的にどのような改変がなされたのであろうか。

旧稿「迷路」の結末は、病院での診察を終えたせつがその帰途、お腹の子に「かうあらせたい」という願望と祈念を抱きながら、「おなかを突きだし、悠然と落ちつき払って歩いて行つた」という、明るい希望にあふれた形をとっている。

一方改稿では、同じ帰途、道連れとなった赤ん坊をおぶった若い母親に話しかけ、荷物をもってやつたりしながら駅に着くのであるが、跨線橋の階段を降りる時、昇ってくる花見の酔客の一团に押されてよろめく連れの母親を支えようとしたせつは、足を滑らせて転落し、翌日流産してしまふところまで終っている。この結末は、以後のせつの生き方を決定づけるものとなり、「崖」の章での彼女の死へとつながっていくことになる。この結末の改稿に弥生子が慎重を期したのも、今後のこの物語の進展への配慮があつたが故と思われる。

今日改作とにかく終了。(5・31)

今朝改作を読み返す。(6・1)

読み返し終る。(6・2)

こうして「黒い行列」「迷路」という、戦前に公にされた作品の改稿は完了し、「迷路」第三部の執筆は六月六日から始まった。

#### 四

私がこれらの作品中の人たちを机上においてけぼりにしてから、すでに十年あまりになる。これは私自らの怠慢ではない。日本の政治的情勢が彼らを自由に行動させること——いひ換へれば、私が彼らを彼らとして正直に描くことを許さなかつたからである。もし私が、軍部で代表されたそのあひだの日本の歩き方に妥協的であつたならば、この作品はもつと早く完結してゐた筈である。しかし、私にはそれができなかつた。

(「迷路」第一部はしがき)

と書く弥生子にとって、日本の敗戦はまさに解放であつた。その自由の中で彼女の構想はどんどんと広がっていった。また、弥生子の歴史観、人間観にも幅ができ、深まっていた。

ところで、野上弥生子には極上の読者、厳しくもあり優しくもあるよき師が幾人もいた。夫豊一郎はもちろんその最たる人であるが、文相、学習院長をつとめた安倍能成は、彼女とともに能楽界の御意見番的存在であり譯仲間であったが、またその文学のよき理解者でもあった。

安倍さんが旅行記の下巻をよんだ由で大に賞讃したハガキをくれた。お坐なりはいはない人だちにうれしい。彼ら程度の人々からその価値を知つて貰へれば私にはそれだけで満足である。一般を相手にして書いた事はこれまでもなかつた。

(18・7・18)

一般の人を相手にして書いてはいない、というのは問題だが、同趣旨の記述は日記中に散見する。一般受けはねらわない、というのが彼女の創作姿勢であった。

田辺氏に「迷路」のことをきいて貰ふ。対軍部の考へ方多くの指サを得た。軍部の構想に歴史的な観察を加へること、民族の生き方の動向に新しい思考を加へることは、主人公の気持を幅ひろく掘りさげるに役立つわけ也(23・5・16)

田辺氏とは哲学者田辺元のこと。北軽井沢の山荘が近かつたこともあって、氏の晩年にはしばしば訪れ、哲学の講義を差しで受けるといった厚遇も得ており、『迷路』についての批評もしてもらっていたことは、日記中にみえる。哲学者といえ、谷川徹三一家とも親しい間柄にあり、その子で詩人となった俊太郎は「俊ちゃん」と呼ばれて、これも日記にしばしば登場する。

経済学者宇野弘蔵も弥生子の師の一人といつてよからう。

宇野弘蔵氏より頼んでおいた調査の事を専門的な委細をこめてしらせて来た。日本銀行の人々に頼んでくれたのである。これほどにして頂かなくともよかつたのに。(23・2・11)

宇野さんのところでは二時間あまりもゐていろいろ語つた。

私の今度の主人公の考へ方と行動について批判を求めた。肯定的な返事で自信を深める。(23・3・28)

この日記で、「肯定的な返事で自信を深める」とあるのは、島木健作の「黒い行列」についての批評文「薄手な青年」(帝國大文学新聞)昭11・11・2)で、「作者よ、転向した現代の青年を余りに薄手なものにして扱はないで欲しい」という批判が、それ以後弥生子の頭から離れることがなかつたからではなからうか。

その他、次男、三男のそれぞれの岳父にあたる社会学者であり、大原社会問題研究所長、NHK会長なども勤めた高野岩三郎、英語学の泰斗市河三喜、更には漱石門下といった縁もあって、小宮豊隆、寺田寅彦、また和辻哲郎などもよき読者であった。美濃部達吉一家、大内兵衛ら法政大学関係の学者たちとも親交があり、思想的にも影響を受けていよう。

敗戦後の、自由な執筆活動を保証する民主主義社会の到来、左翼政党の躍進、労働運動の高揚といった社会情況、そしてよき読者、批評家の存在、更には原稿がまとまり次第掲載するというわがまま勝手な執筆を許してくれた雑誌『世界』の厚遇等々、この『迷路』という長篇小説を支えたいくつかの好条件があったが、何といつても大きかったのはその家庭環境であった。北軽井沢の山荘に籠って執筆に専念することを許容してきた夫豊一郎の理解と協力が、その最たるものであった。

本稿では、戦後の改稿部分について、日記記事を検討することによってその改作過程を追ってきたわけであるが、もう一つ、その創作環境を支えた先の諸条件についても、日記記述の処々から知ることができた。

〔註〕

(1) 『野上弥生子全集』第II期第二十五卷所収。(以下、書簡の引用は同書による。)

(2) 拙稿「野上弥生子の方法(一)——「黒い行列」「迷路」と日記

——」〔長野県短期大学紀要〕第50号)

(3) 『野上弥生子全集』第十一卷所収。

(4) 拙稿「野上弥生子の方法——「迷路」と能楽——」〔長野県短期大学紀要〕第44号)